



S H U N K E N 2 0 0 5 - 0 7 3 3 - 0 2



駿建

2005年夏期号 Vol.33 No.2 日本大学工学部建築学科 日本大学短期大学部建設学科

建築を学んで進んだ道

建築＝「場(SITE)」が生まれる

今村有策

「…とは一体何なのか？」このような根本的な問い。「…」のところは、人間でもいい、文化でもアートでも建築でも入れることができる。いつもヨーロッパやアメリカの友人たちと話をしている、楽しいのは常にそんな問いに向かって、自分なりの考えで答えようとしていることだ。つい先日、ベニスビエンナーレに行った時、友人に紹介されたベニス大学の博士課程に学ぶ若い建築家の友人は、電車の切符の大きさのカードに印刷した何枚ものカードを作っていた。そこにはまるで哲学書の定義集か禅の公案のように、制度や政治にまつわる都市への問いかけが書かれていた。近代以降、多くのイタリアの建築家や批評家たちが、このように政治的な都市へのアプローチを行ってきた。日本では、このようなアプローチを「建築」と呼ぶことにいまだ抵抗があるかもしれない。日本ではいまだ「建物」と「建築」が同義語だから。ニューヨークに住むことになり、コロンビア大学のパーナード・チュミの部屋を訪ねていったとき、突然の来客があった。チュミに紹介されたのはジャック・デリダだった。軽い挨拶のあと、すぐにチュミとデリダを交えて建築にまつわるいろいろな話をする機会に恵まれた。それでも、話をしたことは建築という存在そのものについての根本的諸命題だった。ニューヨーク滞り時代の多くを、同じように荒川修作との禅問答の日々で過ごした。荒川とも偶然に出会い、結局、養老天命反転地を一緒に一から計画することになった。養老の構築物を建築と呼ぶに

は、いまだためらう人も多いが、あの建築が現代に提起した問題は、歴史的にも大変大きなものだったと思っている。養老を貫く思想を一言で言うと西田幾太郎の行き着いた言葉である「私とは場所である」という一言が、もっともふさわしいかもしれない。この思想を身体経験として構築することについて、毎日試行錯誤が続けられた。パートナーであるマドリン・ギンズと荒川も、この概念を言葉に表すために毎日、格闘とも言える口論を繰り返していた。実際の構築物でも言葉でも表現するのが難しい概念を、なんとかして掴み取ろうとしていた。

私は現在、東京都が行う新しい芸術文化政策の実験的な機関であるトーキョーワンダーサイトの館長として、同時に東京都の参与として東京都の文化政策を改革することに邁進している。ここでも考えられていることは、今、東京にとって、美術館とはいったい何なのか？そして今、そこでは何が必要とされているのか？本当に必要なものなのか？地方自治体はいったい何をすべきなのか？あるいはすべきでないのか？そして根本的に「公共」という意味は何なのか？が、問われている。そのような、根本的な問いかけについて、ひとつでも、具体的な像を浮かび上がらせようとしている。

トーキョーワンダーサイトの名前をつける時、作家である知事といくつかの案を話し合う機会があった。そして最終的に「サイト」が選ばれた。そこには「ミュージアム」や「ギャラリー」のようなすでに限定された意味を持つ空間ではなく、よりダイナミックな「場」を生み出そうという思いと、「ウェブサイト」のように「サイト」という言葉は、物理的に限定された空間以上に広



トーキョーワンダーサイト渋谷 7月に渋谷バルコ前に2館目がオープンする
(左) カフェ (右) ギャラリー

養老天命反転地

がりがあるという結論だった。

ここでも、活動の根本的な意味を考えることからスタートしている。その行為こそが、ものを構築する第一歩であり、その時点で、構築されるものの方向性が決められていく。私はそのプロセスこそが「建築」という行為の重要なファクターだと思っている。(いまむらゆうさく)

略歴

1983年	日本大学大学院理工学研究科建築学専攻修了(近江研究室)
1985～99年	磯崎新アトリエ
1991～92年	文化庁在外研究員としてコロンビア大学建築学部客員研究員 バーナード・チュミ・アーキテクト
1991～93年	荒川修作+マドリル・ギンズと「養老天命反転地」の設計に従事
1999年	ライフスケープ研究所設立
2001年～	トーキョーワンダーサイト館長・東京都参与

劇場のプロダクションマネージャー

田中伊都名

私は、現在、2004～2005年の文化庁在外研修制度にサポートされて、ロイヤルオペラハウス・コヴェントガーデン(以下、ROHと記載)のプロダクションデパートメントにいる。このオフィスは、部長とプロダクションマネージャーが5名、そして、アシスタントたちと事務職の総勢13名で構成され、ROHのすべてのオペラ・バレエ、小劇場での実験的な演目、レンタル、コープロダクションなど、すべてのプロダクションの制作を行っている。

このプロダクションマネージャーという言葉は広く知られているが、実際には劇場でのプロダクションマネージャーとはどのような職能なのだろうか。

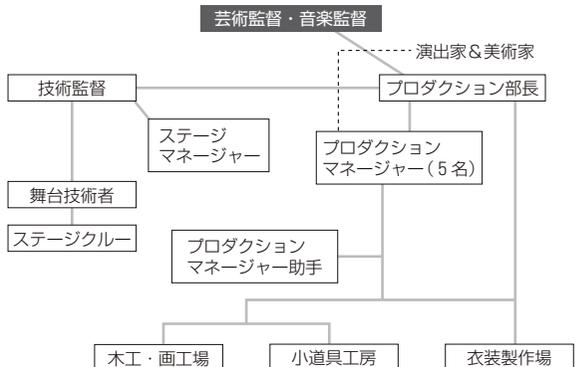
イタリア、ドイツのオペラハウスの場合、技術部長がテクニカルスタッフとそのユニオン問題、劇場の舞台機構の管理関連業務、さらに、プロダクションの制作、つまり装置・衣装・小道具・特殊技術・特殊効果の制作を演出家・美術家と折衝、遂行し、公演の初日を迎えるというシステムになっている。しかし、英国のオペラハウスの仕組みは少し異なっている。劇場の技術監督は、テクニカルスタッフ、劇場の舞台機構について責任を持ち、プロダクション制作に関しては直接的に権限を持たない。プロダクションに責任を持つ役割は、プロダクションマネージャーという特殊な職能がここには存在する。これは、プロダクションを制作するためにあり、音楽以外のクリエイティブな部分を制作する劇場でのキーポイントとなる。

このプロダクションマネージャーの職能に要求される基本的な知識とスキル、そして経験は広範囲にわたる。例えば、舞台技術に関する知識、財務上のマネージメン

ト能力、プロダクションのスケジュール管理、チームの運営能力、仕事の環境管理、困難が発生した場合の対応能力、コミュニケーション能力、IT能力、健康&安全管理の理解と知識、近代的な劇場の構造とそのテクニックの使用についての深い理解、記録作成能力などである。もちろん、演目の内容、演出・美術などの知識は言うまでもない。

さて、ひとつのプロダクションの具体的な業務としては、①デザインの過程に先立って、演出家、美術家、照明家などのプランナーと共に技術ガイドラインについてディスカッションを行う、②プロダクションマネージャー補、もしくは、アシスタント・プロダクションマネージャーを管理する、③リハーサルとプロダクションのすべての側面においてマネージメントを行う、④装置デザインの実現性、構造と予算と時間に関するメソッドを装置美術家へアドバイスする、⑤経費と詳細なスケジュールの準備と早い段階でのデザイン算定、さらにデザインの実現性と経費について、衣装、照明、音響、かつら、ステージ、小道具、吊りものと構造なども同様に検討、⑥演出家、美術家、芸術監督、時には音楽監督を含むプロダクションミーティングとテクニカルミーティング、それ以外にも必要に応じて招集をかけ、打合せを行う、⑦各プロダクションにおいて記録ブックを作成し、プロダクションの正確な記録を残す。これら以外にも劇場の重要な業務として、将来的なプロジェクトの計画を

ROHのプロダクションマネージャー(マックスウエル氏)とそのアシスタント、木工房所長と劇場外のエンジニアで2005年公演「ジークフリード」の鉄骨部分の検討を現場で行っているところ



ROHのプロダクションマネージャーと技術部との関係ダイアグラム

行い、特に、レンタルプロダクション、コープロダクションなどその他劇場との共同作業を行う。

ROHのプロダクションマネージャーと技術部との関係ダイヤグラムを図に示した（前ページ参照）。

現在、ROHでは美術家とそのアシスタントは完璧なる1/25の装置模型と基本的な平面・断面図の提出が契約書上義務づけられている。劇場が美術家より模型を受け取った時点で、プロダクションマネージャーは、鉄骨会社、木工などのワークショップから見積もりが取れる程度の詳細な装置図面を作成するために、想定される材料の検討やその経済寸法、さらに構造なども考慮した上で、アシスタントにその作成を詳細に指示する。この図面が各ワークショップに発送され、算定・具体的に検討され、装置が製作される。装置のパーツが劇場に搬入されてからは、プロダクションマネージャーがテクニカルスタッフに鉄骨部材、木工部材、その他細かなところまで仕込み方を説明しながら、仕込み作業が進んでいく。稽古初日前日まではこの装置が組立場から稽古場にワゴンで移動され、指揮者、演出家、歌手、その他プロダクションに関わる方々が勢ぞろいして稽古初日がくるのである。その後も、演出家、美術家の日々の要望を確認しつつ、初日を迎えるまでプロダクションマネージャーはテクニカルスタッフと共に装置を稽古場と舞台へ移動させて、それぞれで稽古を行いながら、テクニカル作業を計画的に進めていくのである。

このように劇場のプロダクションマネージャーの仕事は鉄骨や木工の構造を始め広範囲に渡る知識を必要とし、劇場の舞台技術を考慮し、それを十分に生かしながら、アーティスティックな意見を尊重し、そのクオリティーを保つ努力をするなど、人・物・時間をまとめ上げなければならず非常に難しいのだが、挑戦するかいのある面白い仕事である。（たなかいづな）

略歴

1992年	日本大学大学院理工学研究科建築学専攻修了（小谷研究室）
1989～91年	劇場工学研究所
1992～94年	フィレンツェ大学建築学部 （92/93年度イタリア政府給費生）
1996～2003年	新国立劇場運営財団
2004年～	ロイヤルオペラハウス・コヴェントガーデン （04～05年文化庁在外研修生）

ファシリティマネージャーと建築

氏家 聡

ファシリティマネジメント（FM）という言葉を知ったことがあるだろうか。この言葉の定義は「企業・団体等が組織活動のために施設とその環境を総合的に企画、



（左）スポーツクラブ外観 製油所の余剰電力を利用した施設

（右）家族用社宅内観（3LDK）人事異動による家族帯同転勤で家財も多いため、玄関からリビングまでを直線とし、幅も広めに引越し作業時の補修を低減

霞が関ビル18Fのオフィス全景
モバイルワークを前提としたIP電話、無線LANを駆使したノンテリトリアルなオフィス



管理、活用する経営活動」（日本ファシリティマネジメント推進協会：JFMA）とある。最終的に引き渡された建物をさまざまなユーザーが有効に利用できるように、快適に維持管理していくことになろう。ファシリティマネージャー（FM'er）は、建築の知識、経験だけでなく、財務を含めたさまざまな事柄をバランスよく判断し、実行することが求められる。

私が、FMに出会ったのは、4年の研究室に所属したころになる。考えてみれば、建物は完成するまでの期間よりそれからのほうがはるかに長い、その建物を本当に使い切ることのできるユーザーがどれほどいるのだろうか。多くの設計要件を整理し、設計して完成させたとしても、利用直後から新たな要求が生じ、陳腐化することは否定できない。高度成長期であれば、スクラップ&ビルドでゼロから再構築することができたかもしれないが、現在はそうしたことが許されるはずもなく、限られた範囲で、よりユーザーが満足できる施設環境を整えることが重要となりつつある。そこにFM'erの重要な役割がある。

私が社会に飛び込んだときは、平成バブルの絶頂期であり、建築ラッシュであった。そうした時代に建築業界とは異なる石油会社の建築部門に身を置き、ユーザー視点で建築と取り組んだ。入社当初に、製油所に隣接したスポーツクラブの建設現場に常駐して発注者と施工現場との調整に奔走し、施設と機器の空間配置の対応が建物を快適に利用するカギとなることを学んだ。また、家族社宅の建て替えでは、分譲マンションとは異なり、入居者が同じ会社の社員であり、転勤が多く、全住戸を同一

条件となるように計画したり、引越しのしやすさなどをプランに反映させたりした。

その他に企業総務の仕事も経験をさせてもらった。この経験が現在の自分の視野を広げてくれた。総務という仕事は言葉どおり、電球の交換から文具消耗品の手配、イベントの設営まで何でも担当をした。オフィスのレイアウトなどもそうした経緯から経験した。実際にどのような仕事をするのか、何が必要なのかなどをヒアリングし、使いやすいオフィスとしての要件をまとめ、その費用や妥当性、工期の調整、業者との交渉など全てを担当した。当事者を説得するのは骨が折れたが、みんなが満足してくれたときは充実感を味わった。

その後石油会社を退職し、オフィス家具メーカーに転職をし、FMの実務経験をベースにオフィスを研究することとなった。大きく環境は変化したがより深くFMについて学ぶ機会を得て、前述のJFMAの主催する研究会にも参加し、より多くのFM'erと出会い、FMの世界が広がっている。現在、その研究会のひとつである、「ITとワークプレイス研究部会」の部長もさせてもらい、他社の方々と建築とFMについて模索しているところである。多くの企業は、オフィスを重要な経営資源と位置づけて、積極的にワーカーのモチベーションを高めるワークスタイルやワークプレイスを模索している。自分が働いているオフィスもそうした取り組みにトライしている。

卒業をしてかなり経つが、大学で学んだ建築計画の基礎や先輩や友人との語らいを通じて得たものはかけがえないものだと思える。社会を経験し、私は人との関わり合いが建築に大きな意味を与えている。建築は見るものではなく、利用するものであり、使い込むことで成長すると考えているからである。設計、施工分野だけでなく、FMを意識した利用者サイドの声を建築に反映させることに興味を持ってほしいと願っている。(うじけさとる)

略歴

- 1989年 日本大学大学院理工学研究科建築学専攻修了(関澤研究室)
- 1989年～ 出光興産
- 1998年～ コクヨオフィス研究所
- 2003年 コクヨオフィスシステムへ異動

カンボジアで学ぶ

小島陽子

移動する住居、地に根を張ったままの木をくりぬいた住居、世界にはこんな住居で生活する人がある。B. ルドフスキーの『建築家なしの建築』(鹿島出版会)という本が、私を建築学科へ誘った。そして現在、文部科学省のアジア諸国等派遣留学生としてカンボジアに留学

し、実際に移動中の住居や山岳民族の住居に出会い、カンボジアの建築を楽しんでいる。

●なぜカンボジアの建築なのか？

学部4年時、建築史・建築論研究室(片桐研究室)のフィールドワークでカンボジアを訪れた。アンコール・ワットの均衡の取れた美しさに圧倒され、そこに至るまでの技術者の試行錯誤の過程を明らかにしたいと博士課程に進学する。華やかな古都アンコール地域での研究、修復活動が進む(片桐正夫教授はアンコール遺跡国際調査団内にアンコール・ワット修復委員会を組織する)一方、地方都市間や東南アジアの他地域との関連、アンコール期前後の建築史はほとんど明らかにされていない。アンコール・ワットだけではなく、カンボジアの建築文化を明らかにし、紹介する時期がきている。

●なぜカンボジアで学ぶのか？

留学先の王立芸術大学では、設計を重視する建築学部ではなく、考古学部に在籍する。内戦後1989年に再開された同学部は今も試行錯誤が続く。海外で学んだカンボジア人と外国人講師が教鞭をとる。フランス人講師によるサンスクリット語や、古クメール語を扱う碑文学の講義は難解だ。しかしイシャナヴァルマンと舌を噛みそうな神や王の名前も、語源のサンスクリット語を知れば親しみもわく。碑文には現在にも続く風習や儀礼も刻まれる。カンボジアの学生たちにはごく普通の風習である



一般道を移動中の住居



建設中の山岳民族の住居



紀元前900～600年の墳墓の発掘調査風景

ということ、それが私にはとても新鮮だ。歴史的事実や建築のデータを集積するだけではなく、カンボジア人の考えや精神を学び、彼らの視点から建築を理解すること。カンボジアで学ぶことの意義はここにある。

大学での講義の他に、発掘調査と建築調査に力を入れる。紀元前の墳墓の発掘調査は私の研究に無関係に思える。しかしどの地域に人が住みはじめ、村ができ、アンコール期、そして現在に続くまちが形成されたのか、または途中で放棄されたのか。そしてそこはどのような環境なのか。このような広域的な視点はカンボジアの建築史を考える上で重要だ。土のかき方から学んだ初の発掘調査は焼き鳥パーティで終了した。地方出身の学生が隣りに数羽の鳥を絞める。ガスも電気も水道もない。いろいろなものが代用される。壊れた機器はその場で分解して直す。彼らは自然の中で育ち、生活の知恵が豊富だ。日本から来た先生方が50年前の日本と懐かしむ地方の光景は、戦後を知らない私に大きなショックを与えた。生きるための当たり前のことを彼らから学んでいる。カンボジアで学ぶことのもう一つの大きな意義である。

建築調査では、今度は考古学部に建築の見方や実測の仕方を教える番だ。遺跡や民家、寺院をもとめてカンボジア中を歩いていると、経済発展の過程で生じるさまざまな問題に出会う。同行する先生や学生、地元の人々とカンボジア式の解決策を模索し、新たな枠組みを仕掛けていく。多元価値社会が承認され、双方向の新たな国際協力が模索されている。カンボジア人の考え、精神を学び、共に問題解決にあたることは、その第一歩だと考える。酷暑と慣れない文字、そして自分の無知にしばし立ち止まりつつも、カンボジアと向き合い続けていきたい。

(こじまようこ)

略歴

2003年	日本大学大学院理工学研究科建築学専攻修了(片桐研究室)
2003年～	日本大学大学院理工学研究科建築学専攻博士後期課程
2004年	文部科学省アジア諸国等派遣留学制度派遣留学生として、カンボジア王立芸術大学考古学部に留学

建築を学び、福祉に進む

坂田真裕

●なぜ、福祉に進んだのか

私が小学生だった頃、私の祖母は、自宅で転倒・骨折したことで、亡くなるまでの数年間、家族の介護を受ける生活を送りました。当時の私は、介護という言葉も知りませんでしたが、そんな祖母との生活を自然に受け止めていたことが、現在の私の原点だと感じています。

日大では、建築についてさまざまなことを学びました

が、そのような経験のあった私は、自然にバリアフリーなどに興味を持ち、大学4年には野村研究室にお世話になりました。研究室では、バリアフリーやユニバーサルデザインについての理解を深めると同時に、福祉に関するさまざまなことを学んだことで、福祉への思いや意識が次第に強くなっていきました。

卒業後、前職で集合住宅の施工管理や設計に携わっていましたが、福祉住環境コーディネーター3級取得を機に、建築という範囲を超えて、建築と福祉の接点として何かできることはないかと考えるようになりました。また、学生時代より注目していた介護保険制度の動向を、直接肌で感じたいという思いが強まり、介護保険制度のスタートと同時に福祉に進むことを決意しました。

●今の仕事で活きる、建築を学んだこと

現職を一言で説明するのは難しいのですが、福祉に関連する人材の育成や教育といった事業の企画開発を担当しています。現在、さまざまな事業に携わっていますが、建築を学んだことを直接活かしているのは、高齢者住宅改修研修の企画開発です。この研修は、野村先生をはじめとしてさまざまな方々のご協力を得ながら研修プログラムをつくり、さまざまな地域で開催してきました。高齢者住宅改修は、単なるリフォームと異なり、高齢者の心身の状態や生活の状況にしっかりと合ったプランにならないと意味がありません。そこで、建築職と福祉職が良好な連携関係の下で住宅改修を行うために必要な知識・技術を提供する研修を行っています。これからもこの研修をさまざまな地域で開催し、建築と福祉の接点として活動できる喜びを感じながら、高齢者住宅改修の質の向上に寄与するよう努めていきたいと考えています。

また、研究室での活動を通して、環境が人の活動や動作に与える影響の大きさを学び、「環境づくり」の重要性を知り得たことが、現職でのやりがいにつながっています。現在、交通事業者の職員やさまざまなサービス業の従業員を対象とした高齢者や障害者への接客・接遇の方法に関する教育研修に携わっています。高齢者や障害



高齢者や障害者への接客・接遇研修における高齢者疑似体験学習の様子

者が安心して外出するためには、利用する施設（ハード面）のバリアフリー化も必要ですが、そこで働くスタッフの適切な対応（ソフト面）も欠かせません。ハード面とソフト面の両輪が互いの足りない部分を補いながら機能することが、良好な環境であるといえます。ソフト面の環境づくりであるこの研修では、高齢者や障害者がその施設を安心・安全・快適に利用できるよう、ハード面の機能を補いながら適切に対応するために必要な知識・技術の提供に努めており、そのような“環境づくり”に携われることにやりがいを感じています。

●今、建築を学んでいる皆さんへ

建築も福祉も、人の暮らしを支える環境づくりの分野であると考えれば視野が広がります。私は福祉に進みましたが、建築とは関係ない世界であるとは思っていません。これからも、建築を学んだことを活かしながら、多くの人に喜ばれる福祉の環境づくりに携わっていきたいと考えています。今、建築を学んでいる皆さん、超高齢社会を迎えようとしているこの時代、高齢者や障害者をはじめとする多くの人が、より利用しやすい環境を求めています。広い視野で建築に携わることで、からだの状態に係わらず、安心して住める住宅や、利用しやすい建築が増えることを期待しています。（さかたまさひろ）

略歴

1998年 日本大学理工学部建築学科卒業（野村研究室）
 1998年～ スターツ
 2000年～ 総合健康推進財団

古建築・古民家・古材ギャラリー

石川重人

1978年春、私は小林文次先生の建築史研究室におりました。思えば当時から文明の急速な発展と早すぎる社会の変化にはどうしてもついていけないと感じていた私が、何とかたどり着いたのが古建築の悠久なる世界でした。

私が古建築の中でもとりわけ民家に興味を持つようになったのは、今から約20年前に山梨県指定の文化財であった清白寺の庫裏の解体保存修理工事の現場監督をしたことによります。このとき文化財建造物保存技術協会

の先生方や大工の棟梁、多くの職人さんたちに民家のことをいろいろと教えていただき、私は民家のとりこになってしまいました。それ以来、地域の特色「らしさ」が急速に失われていく状況下であって、いかに地域の宝物である民家を守り残してゆくかが私の大きな課題になりました。

その後も民家保存の試みを模索しておりましたところ、1997年、日本民家再生リサイクル協会を発足することになりました。これは民家を求めているオーナーと解体処分されようとする優良な民家との間を取り持とうとする試みで、それまで見えにくかった古民家の流通を公表することで、1棟でも多くの民家を残そうとするものでした。

さらに1999年、解体古材の有効利用を図るために、日本民家再生リサイクル協会内に古材バンク13社を創設または認定し、古材ネットワークを立ち上げました。当社のバンクを伝匠舎古材ギャラリーとしましたのは、古材がただ古いだけの木材ではなく、時間を掛けて熟成された骨董美術品だと感じたからです。

古材とは何でしょうか、割れて、曲がって、ねじれて、風化して、時に虫が食べ、雨に打たれて腐っている、また職人によってあけられたホゾ穴や貫穴といった欠損がある。こんなどうしようもない扱いにくく不揃いな材料が、長い年月を掛けて熟成されて、その1本、その1枚が他には無い個性と魅力を持っているのです。

当社の原木古材のストック場には解体された民家が格納されています。また大黒柱と牛梁のセット、あるいは曲がりくねった梁組のセットが格納されています。またさまざまな民家を構成する部材や、あるいは門扉や建具が格納されています。そしてさまざまな施主様、設計者、工務店、内装業者の要求によって加工を加えたり、あるいはそのままの形で流通していきます。

伝統を守り、伝統に学び、そこから新たに建築を創っていく。これが伝匠舎の唯一の考え方であります。

（いしかわしげと）

略歴

1978年 日本大学理工学部建築学科卒業（小林研究室）
 1978年～ 五光建設
 1984年～ 伝匠舎石川工務所



（左）「伝匠舎」看板
 （中）伝匠舎古材ギャラリー
 （右）再生住宅 H邸

欧米の環境都市を訪れて

海外出張報告

三橋博巳



ロスドルフ市長と都市計画局長を表敬訪問



ベルリンの再開発地区

本学の海外派遣研究員（短期B）として約1ヵ月、「都市建築の環境システムに関する研究」のテーマで、欧米諸国の都市と建築の環境重視のまちづくりや土地利用、建築の先進事例について調査するため、環境都市の先進国であるドイツ、北欧を中心に2月下旬～3月下旬においてドイツ、イギリス、フィンランド、スウェーデン、アメリカの順に訪れた。本報告では環境都市の先進事例や旅での感想などについて述べる。

●ドイツ/ロスドルフ・ベルリン 他

ドイツではまずフランクフルトを訪れた。フランクフルト市役所・土地利用局に行き、担当者に親切に対応していただき、都市再生計画の資料を収集し、ヒヤリングを実施した。

翌日はダルムシュタットに行く。古い工場跡地を利用した複合的な施設の開発事例の成功例の調査を行なった。平日なのに人が多く来ており、昼はレストランがどこも満員で本当に活性化しているのを実感できた。広場もバスと人間とトラムと車がいっぱいであるが、にぎわいが感じられておもしろい。成功例は本当であった。

環境先進都市、ロスドルフ市の市役所を訪れた。古い木造の建物が保存された街並で、道路の拡幅やアンガー形式の広場など、ユニークな街づくりがなされていた。道路の交通量は多く、都市部ではないのに本当に多かった。広場の創出が墓地につながっているのもおもしろい。とにかくコンパクトな原型を見た感じであった。また、小さいながらも市役所にはソーラーエネルギーなど環境を重視した政策が随所に取り入れられている。

都市計画局長 Josef Traegner に会うことができた。アポイントをとらずに訪れたのに親切に対応してくれた。資料もたくさん頂き、説明後も建物や街並を案内していただいた。その後、市長が来ているので会っていただけるとのことで若いすてきな女性の市長 Christel Sproessler にお会いすることができた。幸運であった。訪問のサイン帳にサインし、驚きと共にうれしい出逢いであった。外国での人の親切さに感動した。予定の時間を超過し、夕方になってしまった。

夕暮れ時には新しい住宅開発団地の現場を視察した。カラフルな建物と広大な環境を重視した開発の住宅団地は新しい駅もできており、今後発展してかなり大きな団地になるものと思われる。フランクフルトに向けて電車で戻った。気持ちの良い、充実した旅の1日となった。

次にベルリンの再開発地区の現場を見学、数多くの新しく開発されたモダンな建物と共に全体の開発は進んでいた。しかしながら、中央駅（レアター駅）は2006年完成予定だが、遅れているとのことで、工事もストップしている感じであった。財源が不足しているとのことである。

●イギリス/ロンドン・ケンブリッジ

ドイツからイギリスのロンドンに向かった。ケンブリッジ大学に1年間滞在中の明海大学、中城教授が空港に迎えに来てくれた。今話題になっている都心のパディントン駅近くの大きな運河沿いの再開発計画の現場を見学した。超高層住宅、水辺、運河、（水上生活者）など1日かけて運河沿いを歩いて見学した。また、超高層住



ロンドン
パディントン地区の運河沿いの再開発地区



ケンブリッジの住宅



ケンブリッジ
南極研究所（BAS）にて

宅のマンション会社の方にヒヤリングし資料を頂いた。

ケンブリッジに行き、中城教授の所に泊めていただいた。中城教授の案内でケンブリッジ大学の土地経済学部などを訪れた。自然の豊かなケンブリッジは本当に素晴らしい。道路の乗り入れの制限システムも興味深い。また、約20年ぶりにケンブリッジ大学の近くにあるイギリス南極研究所(BAS)を訪問した。ちょうど、イギリスの新しい基地の計画案の国際コンペがあったところで応募作品を見せていただいた。収穫の多いケンブリッジであった。

ケンブリッジでは日本大学とサマースクールなど交流を続けているペンブルックカレッジを訪れた。Gideon Malone氏に案内していただいた。今までケンブリッジソサイアティーのメンバーの方々に話を聞いていたがやっと現地を訪れることができ、念願が叶い良かった。なお、Malone氏は5月に日本を訪れたので日本大学で再会することができた。ペンブルックカレッジは本当に中心部にあり伝統のある素晴らしいカレッジであるのを実感した。ケンブリッジも本当に充実した楽しい旅となった。これは中城先生のおかげで、車で2日間遠くまで田園風景を見ることができたのは本当にありがたいことと感謝の念でいっぱいである。最後の日も空港まで送っていただいた。

今回の訪問で緑地空間の豊かな住宅、ロンドンの中心市街地での緑地空間の確保と、またイギリスの地方での田園風景は日本にも必要なものと痛感した。

●北欧／ヘルシンキ・ストックホルム

ロンドンからヘルシンキに行く。とても寒い、マイナス10℃くらい、雪も降っている。3回目であるが、友人との再会も楽しみにやってきた。ヘルシンキの都市計画局に行き、都市開発の状況を聞き、ヘルシンキ郊外の環境重視の住宅の開発地の現場を見に行く。環境重視の住宅を主として街づくりが数多く計画され実施されていた。残念ながら友人と会うことはできなかったが、電話で話すことができた。

ヘルシンキからストックホルムに行く。雪が降るストックホルムは、とても寒い中の滞在であった。ストッ

クホルムで、尚美学園大学(本学不動産科学専攻の教授であった)丸尾教授と待ち合わせて現地を視察した。環境重視の街づくりを現地調査した。雪の中、Kristina Berglund 女史に案内していただき、以前も現地調査したハンマビー市、ナッカ市など見学した。またストックホルム大学の先生方と旧交を深めた。フランスのニースでのワークショップ(テロのあった年)、また東京でのワークショップ以来の再会であった。ストックホルム大学の学長のEskil Wadensjo教授、社会学部長のCarl Le Grand教授、また夫人のToshiko Tsukaguti-le Grand女史などと楽しい会食となった。雪の中、ストックホルム大学を訪れた。Carl Le Grand社会学部長の息子さん(同大学大学院生)に案内してもらった。ストックホルム商科大学も再び訪問、知人の先生方との出逢いでなつかしい旅ともなった。また新しい収穫も多かった。

あと、シアトル、ハワイ経由で帰国した。26日間の旅も過ぎてみれば短い。今回はドイツ、北欧の環境先進国を中心に訪れたが、どこの国も都市開発がなされているが、環境重視のコンセプトのもとにサステナブルな都市建築を目指して住民も参加する形で開発を実施している現地を見ることができ、大きな収穫であった。また、人との出会いや知人、友人との再会は楽しみであり、嬉しいものである。

研究のための調査資料収集は大変だが楽しみであり、つい欲張って集めてしまう。今回もダンボールで各国から資料を送ったが、資料よりも送料が高くなってしまった。また海外に行く楽しみは、やはり思いがけない出逢いや、知人との出逢いや再会である。毎年海外に出かけているが、いつも必ず出逢いがあり、やはり海外の旅は楽しい。今回の出張で得た資料など、今後の研究に生かしていきたい。

なんと寒い国ばかりの雪の降る時の旅となってしまった。極地での南極との絆を考えると、なんとなく寒い国との縁があるようだ。

最後にこのような機会を与えていただいた大学、関係各位に心より感謝いたします。(みつはしひろみ・教授)



ペンブルックカレッジ(日本庭園)訪問
Gideon Malone氏の案内で



ハンマビーの開発地区を案内する
ベルグラント女史



ストックホルム大学の先生方と旧交を温める

新任非常勤講師紹介

伊藤梅雄 先生 (旧)設計演習Ⅱ)

略歴

- 1975年 大阪市立大学工学部建築学科卒業
- 1975～2000年 市浦都市開発建築コンサルタンツ
- 2001年 アールエイチエス技術研究所代表



私は、ハウジング分野を専門とする計画・設計組織に30年近く在籍し、人間居住に関する諸問題を対象とし、主に都市的なスケールでの設計活動に従事してきました。個々の建築設計は個人的なものですが、いざ建築されると立地場所や周辺環境との関係などが求められ、否応なく社会性を帯びることになります。学生の皆さんに、都市的なスケールから地区・街区・建築レベルまでの空間をトータルに理解し計画・デザインすることの意義、面白さを少しでも伝えたいと思っています。
(いとううめお)

国吉直行 先生 (都市デザイン特論)



横浜自動車道



略歴

- 1971年 早稲田大学大学院理工学研究科建設工学専攻修了
- 1971年 横浜市入庁 都市デザイン担当(後に室)設立に参加
- 2001年 都市計画局都市デザイン室長
- 2004年 上席調査役 エグゼクティブアーバンデザイナー

今年度設置された「都市デザイン特論」は、近年課題となっている都市空間の魅力形成や景観づくりについて学ぶ講座です。各都市が独自の魅力を持つには、その都市の、地形や歴史文化、経済などに依拠した固有の魅力形成の理念を築き、建築、道路、公園、広場、街路樹、街灯など多様な施設のデザインがこの理念にそって統合・演出されることが重要です。私の横浜市での約35年の都市デザイン活動を中心に講義を展開します。
(くによしなおゆき)

佐藤正章 先生 (循環環境管理)

略歴

- 1979年 東京大学大学院工学部建築学専門課程修了
- 1979年～ 鹿島建設



本業は主に空調の設計だったのですが、最近では省エネルギーからサステナブルデザイン、LCA(ライフサイクル環境評価)、廃棄物評価、さらにCASBEE評価(建築物総合環境性能評価)にまで手を広げています。環境配慮の取り組みが設計全体のあり方にまで影響し、デザインの手がかりの一つにもなっています。広い意味での環境配慮建築のあり方を皆さんと考えていきたいと思っています。
(さとうまさあき)

茶谷文雄 先生 (建築基礎構造特論Ⅱ)

略歴

- 1971年 早稲田大学大学院理工学研究科修了
- 1971～2003年 大林組技術研究所、建築基礎研究室研究員を経て、同室長
- 現在 同プロジェクト部 専門主事



基礎は地盤の下にあって人目につくこともなく、上部構造を安全に支持するという重要な役割をひそやかに果たしています。また、地盤は鉄やコンクリートと異なり自然堆積物のため、さまざまな顔と性格を持っています。その多様性を理解し、上部構造に応じて最適な基礎を計画することは、多くの知見とアイデアを必要とする創造的な行為になります。このような基礎の計画の考え方を一緒に学んでいきたいと思っています。
(ちやたにふみお)

小平恵一 先生
(デザイン基礎, 建築設計Ⅰ)



柳井の家



略歴
 1983年 日本大学理工学部建築学科卒業
 1983～88年 富永謙十フォルムシステム設計研究所
 1990年 小平恵一建築研究所設立

自分が関心を抱いている事象や趣味などを探求し、深めていく行為は、ある意味、建築を思考する上で大きな糧となり得ます。しかし建築は社会性の上に構築されるので、前述の探求のみに収斂させるのではなく、広く社会との関係性を意識し、ためらわずに行動していろいろな経験（設計事務所でのアルバイトやサークル活動など）を重ねてみてはいかがでしょうか。これらの経験は後の自分自身に対して大きな指針となります。そしてなにより“建築”を楽しんでください。
(こだいらいけいいち)

佐々木葉二 先生
(ランドスケープデザイン)



六本木ヒルズ 6・6広場



略歴
 1971年 神戸大学卒業
 1973年 大阪府立大学大学院緑地工学コース修了
 1987～88年 カリフォルニア大学、ハーバード大学大学院客員研究員
 1989年～ 鳳コンサルタン環境デザイン研究所設立
 2000年～ 京都造形芸術大学教授、学科長

近代以降、パブリック・スペース（公共空間）の出現により、ランドスケープアーキテクトのデザイン対象は、公園や広場、街路、商業モール、さらには建築を含む全体景観のデザイン、コミュニティ・デザイン、地球環境を対象としたエコロジーデザインまで広がっています。社会的風景の中に造形を開放し始めたこの分野は、もはや与えられた敷地内部で収束する予定調和的な発想では対処できなくなっています。脱工業化社会の中で生きる人々のための環境とは何か？という新しいコンテキスト（文脈）の読み取り方を一緒に学びましょう。
(ささきようじ)

杉 千春 先生
(建築設計Ⅲ, 建築設計Ⅳ, 設計演習Ⅰ)



Baren house
(バーレンハウス)
housing complex
in Shibuya



略歴
 1981年 日本大学芸術学部美術学科デザイン科卒業
 1981～96年 スタジオ建築計画
 1996年 プラネットワークス設立（高橋真奈美と共同）

設計事務所を設立してから今年でちょうど10年目になりますが、どのような規模のプロジェクトであっても、必ず一人以上のスタッフがぴったりと張り付いて仕事を進めているので、今までに完成したプロジェクトは40程度です。一つ一つのプロジェクトに費やした時間と労力を考えると、やはり建築が好きで、楽しんでいるからできてきたことだと思います。これからこの業界に入ってくることになる学生の皆さんにも、設計課題を通してこの楽しみ方のほんの序の口の部分でも伝えることができると考えています。
(すぎちはる)

田井勝馬 先生
(デザイン基礎, 建築設計Ⅰ)



COURT DECOR
OYAMADAI



略歴
 1984年 日本大学理工学部建築学科卒業
 1984～2001年 戸田建設設計部
 2001年 田井勝馬建築設計工房設立

建築を創るということは、自分を表現することだと考えます。設計は自分の考えを組み立て、プランニングし、かたちにする難しい行為ではありますが、その生みの苦しみを味わってこそ、達成感も得られます。それが建築の醍醐味であり、建築家としての喜びでもあります。ですが、なかなか自分を見つけ出すのは困難です。学生の皆さんはまず、いろいろな建築に興味を抱き、見て、触れて、考えることです。そうすることによって建築家の思考を感じることができ、そんな中からヒントを垣間見ることができるとも思いません。
(たいかつま)

野沢正光 先生

(建築設計Ⅴ, サステナブルデザイン特論)

略歴

1969年 東京芸術大学美術学部建築学科卒業
1969年 大高建築設計事務所
1974年～ 野沢正光建築工房設立
2002年～ OM 研究所代表取締役



再登板の野沢です。数年前に数年間講師を務めていましたから5号館はごく馴染み深い場所です。先日、久しぶりにお邪魔した折に、当時の先生方の顔が浮かんできました。特に小谷先生の洒脱でダンディな昔話は大学を訪れる楽しみの一つでした。また今年は前川さんの展覧会の年でもあり、前川さんと一緒にされたプロジェクトのエピソードなどをお話されたことを思い出します。是非一度お目にかかりたいものです。大学の個性はこうした先達との応答によって知らず知らず作られていくのでしょうか。ほんの少しですが、ほくもお役に立てればと存じます。よろしくお願ひします。

(のぞわまさみつ)

内村綾乃 先生

(短大・デザイン基礎, 建築設計Ⅰ)



T_FLAT/
等々力の集合住宅

略歴

1990年 日本大学生産工学部建築工学科卒業
1990～98年 空間研究所
1998年 A studio 設立



設計の仕事は自分で考えなくては何も始まりません。自分で掴んでもらうしかないの、そういう点でいうと学校で教えられることはほんの一部のことではないかもしれません。

学校生活を通して設計事務所に手伝いに行くこと、展覧会や実際の建築物を見に行くのもよいでしょう。実際に体験することは何ものにも代えられない経験となることでしょう。いろいろなことにチャレンジしてみることをお勧めします。

(うちむらあやの)

徳田良英 先生

(短大・福祉住環境概論)

略歴

1989年 東京都立医療技術短期大学理学療法学科卒業 理学療法士 都内の病院で理学療法の臨床業務をしながら、東京理科大学、横浜国立大学大学院で建築学を学ぶ
1996年 茨城県立医療大学保健医療学部理学療法学科勤務
2000年 東京都立大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程修了
2003年 帝京平成大学健康メディカル学部理学療法学科勤務



後期、船橋校舎で「福祉住環境概論」を担当させていただきます。普段は帝京平成大学の市原キャンパスで勤務しております。理学療法の仕事をしながら建築学も齎ってきた経験を皆様に伝えられればと思っております。いろんなひとがいます。どんなに格好がいい建築でもひとが使いにくければ有難みも半減。せつかく設計して残念な作品にはしたくないですね。講義では建築を使う「いろんなひと」の話を中心に、建築との対応関係を取り上げます。

(とくだよしひで)

中田善久 先生

(短大・建築施工法)

略歴

1988年 日本大学生産工学部建築工学科卒業
1990年 日本大学大学院生産工学研究科修了
1990～2000年 西松建設(建築設計部, 技術研究所, 東京建築支店)
2001年 ものづくり大学技能工芸学部建設技能工芸学科
現在 同助教



これまでに、主にコンクリート材料とその施工方法に関する研究や実際に建物の施工を行ってきました。実際に建物をつくっていく、“ものづくり”の楽しさを少しでも理解してもらいたいと思っています。建築の施工において、重要なことは経験すなわち自信とあきらめられないことです。しかし、大学生活において本当の意味での建築施工を経験することができない面もあります。大学の中でも社会に出て役に立つことがいっぱいあるので、楽しみながら授業に取り組んでください。

(なかたよしひさ)

ランドスケープとのかかわり

田村裕希

筆者略歴

1994年 日本大学理工学部建築学科
(企画経営コース)卒業
1994～98年 東京ランドスケープ研究所
1999年 田村環境計画設立



大学時代の講義の中でも設計演習は、自分の建築に対する考えを模索する場として、特に真剣に取り組んでいたことが思い出されます。与えられたテーマに対してどのような切り口でデザインを展開していくか、皆がそれぞれ個性的な考えを持って熱く議論が繰り返られていました。例えば、外観デザインから、構造の新しい提案から、インテリアイメージから、と数多くの切り口がある中で、特に私は「建築と外をどう繋げるか」「建築を置くことによって周囲はどう変わっていくのか」といったように建築自体のデザインよりも、むしろその外側の状況を中心に考えを巡らせていました。就職を考えるにあたって、自分のそういった外部へのこだわりを活かせる分野として、ランドスケープの世界を選びました。

実際、足を踏み入れたはいいいものの、ランドスケープに関する知識も経験も皆無に等しいまま、実務に携わることになったので、最初の数年間は、何をもとに計画が進められているのかを把握することだけで精一杯という状況でした。それまでは当たり前のように見えていた風景が、実は緻密な勾配設定や土量計算などをもとに出された「造成計画」や、地被・低木・高木と何層にも分け四季折々の表情を検討してつくられた「植栽計画」など、数多くの要素がバランスよく重ね合わされてできあがっているということに、実務を通して初めて気付かされました。

また、ランドスケープ設計として提示される敷地のスケールの幅広さについても、最初は戸惑いを覚えました。数十センチの隙間のような場所から何百メートルの広が

りのある空間まで、イメージをそれぞれ切り替えながらデザイン検討を行わなくてはならないはずが、最初はなかなかその感覚がつかめずにいました。そのため、図面と現場を何度も照らし合わせたり、先人の創り上げた作品を巡ったりしながら、実際に多くの空間を体感し、徐々に慣れていったように思います。

また、デザインに直結することではありませんが、空間の利用や仕組みを検討する仕事にも数多く出会いました。例えば最近では、「自然公園」という空間に対してどの位の人が滞留するのが適正なのか、といった「適正収容力」の問題に取り組みました。にぎやかなことがプラスに捉えられる都市空間とは違って、原生的な自然風景を楽しむための「自然公園」では、ある程度静けさを保つことがその空間の価値を高めることとなります。そのため、混雑に対する人間の許容量などからその場所の適正な密度を検討し、それをもとに利用調整を行うという取り組みです。このようなことになると、建築とは随分かけ離れた領域と思われがちですが、人間と空間の関係を調整＝デザインするという点においては同一線上にあるのではないかと思います。

私がランドスケープにかかわり始めて10年以上経ちましたが、まだまだ未知の領域や深めていかななくてはならないことがたくさんあります。学生時代に建築を通してランドスケープを思考していたように、これからはランドスケープを通して建築を思考し提案していけたらと思います。

(たむらゆき・ランドスケーププランナー)



文化学園軽井沢山荘外構設計
地形に沿ったアプローチデザイン
(建築：大成建設(株) 写真：阿野太一)



東京都恩賜上野動物園広告施設デザイン
(実施コンペ)
当動物園初のPFI導入による施設整備



日光国立公園尾瀬地区
人間の数をコントロールすることによって風景を
保全する取り組み (写真：中内兵衛)

平成16年度 建築学科就職状況

建築学科就職事務室

◆概況

依然として続く経済不況の中ではありますが、求人数が増加傾向にあることからわかるように、少しずつ景気は上向きになっている印象を受けます。しかし、平成16年度就職希望者の合計は294名、就職内定者の合計が232名、希望者に対する内定率は78.9%と、昨年度と比較すると内定率は減少しました(表-1)。本年度の就職希望者は、積極的に情報収集をせず、企業の採用活動のピークを迎えてしまったような印象を受けます。近年、多くの企業はインターネット登録を応募条件とした採用活動を行っていますので、企業より内定を得るには、就職希望者が積極的に活動をする必要があります。

また、進学者数も昨年度より減少していることも気になるところで(127名→103名)、就職希望者と同様に進学希望者も早期に試験準備をする必要があると言えるでしょう。

求人件数(表-2)を見るとわかるように、本年度は3年次の11月より企業の求人申し込みがありました。来年度は企業の採用活動がさら

に早期化することが十分考えられますので、自分自身の将来の方向性を早期に決定し、十分な準備をすることをお勧めします。

◆求人会社の状況

昨年度と比較して、本年度は求人会社数に関しては大幅に増加(877社→1,174社)し、平成12年度以来求人数が1,000件を超えました。求人会社数の増加の主な内容は、建設(214社→270社)、コンピュータ・情報(26社→102社)、製造業・営繕・その他(121社→211社)が特に目立ちます。

建築学科の求人申し込みは、ここ数年3月に集中していますが、本年度は1～2月・4月・6～9月と集中する時期が3つありました(表-2)。これらの時期の求人内訳を見てみると、1～2月は大・中規模建設業・住宅産業、4月は大・中規模建設業、6月は中・小規模建設業、7～8月は製造業・営繕・その他、9月は情報・コンピュータ関係の求人数がそれぞれの時期に特に多いのが特徴として表れました。就職協定廃止により、企業の求人申

し込みが全体的に早期化していると共に、業種によって求人申し込み時期のピーク時期が異なるようですから、就職活動をする学生諸君は、複雑化している昨今の就職活動事情を踏まえ、今後の将来を早期に考えて決定していく必要があると言えるでしょう。

特に住宅産業は早期化傾向が強くなり、この傾向は来年度も見られることが十分予想されます。この業種を希望する学生は、3年次の夏休みに積極的な情報収集と採用試験対策が必要と思われます。

◆就職内定者の内訳

昨年度と比較すると、本年度は就職希望者数に対して内定者数は減少しました。内定者数の傾向は、建

表-2 月別求人件数

	平成16年度	平成15年度
11月	1	0
12月	16	20
1月	102	32
2月	128	102
3月	98	268
4月	202	115
5月	97	78
6月	102	69
7月	150	75
8月	108	40
9月	113	16
10月	51	29
11月	6	33
12月	0	0
1月	0	0
2月	0	0
3月	0	0
合計	1,174	877

表-1 就職状況の概要

注：()内は女子内数

	平成16年度			平成15年度		
	学部	大学院		学部	大学院	
		建築	不動産		建築	不動産
就職希望者数	236(58)	49(10)	9	221(60)	65(17)	4
就職内定者数	188(43)	37(5)	7	189(44)	51(12)	4
大学院進学者数(留学希望・その他含)	102(29)	1(0)	0	122(29)	4(1)	1
就職・進学者数	290(72)	38(5)	7	311(73)	55(13)	5
求人会社数	1,174			877		

設業（12.0%→15.8%）と住宅産業（23.2%→30.2%）が増加しましたが、設備（3.6%→1.5%）、コンピュータ・情報（2.7%→0.0%）が目立って減少しています。

特に住宅産業は、進学者を除く内定者の内訳では44.0%に達し、建設業内定者（23.1%）など他業種と比較しても大きな割合を占めています。さらに、内定者女子の内訳を見ても、

50%の女子学生が住宅産業に決定しており、住宅産業が女子学生も積極的に採用している傾向もうかがわれます。

しかしここ数年、住宅産業は技術職採用にもかかわらず営業に携わることが多く、自身の適職ではないと入社後早々に判断して転職する卒業生が目立ちます。企業の採用活動早期化・複雑化を背景に、学生がいさ

さか勇み足で就職活動を進め、浮き足立って就職先を決定してしまうことが大きな原因の一つと考えられます。早々に企業から内定通知をもらっても、自身の適性・適職について熟慮した上で、自分の就職先を決定する必要があるのではないのでしょうか。

（平成16年度就職担当：根上彰生、事務担当：矢萩有美子）

表-3 求人・内定者の内訳

	求人社社数				内定者数								内定者数割合
	大企業	中企業	小企業	計	大企業		中企業		小企業		計		
					学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	
A 建設業	75	99	96	270	28(1)	8	11(1)	1	4		43(2)	9	15.8
B 住宅・不動産	30	72	39	141	68(16)	4	17(4)	2	8(3)		93(23)	6	30.2
C 設備	29	35	24	88	3				1	1	4	1	1.5
D 設計事務所・インテリア	9	32	72	113	3	5(1)	5(3)	3	13(5)	6(3)	21(8)	14(4)	10.7
E 建材・エンジニアリング	34	72	24	130	8(2)	1	4(2)	1		1	12(4)	3	4.6
F コンピュータ・情報	26	40	36	102							0	0	0.0
G 製造業・営繕・その他	75	98	38	211	3(2)	2(1)	3(1)		4(1)		10(4)	2(1)	3.7
小計	278	448	329	1,055	113(21)	20(2)	40(11)	7	30(1)	8(3)	183(41)	35(5)	66.5
H 官公庁・大学 法人				56 63							4(2)	2	1.8 0.0
I 進学 (大学院・研究生・留学・その他)											102(29)	1	31.4
J 自営業											1	0	0.3
総計				1,174							290(72)	38(5)	100.0
											328(77)		

以下の統計は学部、大学院建築学専攻に関するものである。

注：大企業…従業員500名以上、中企業…従業員100名以上、小企業…99名以下、()内は女子内数、求人社社数…再募集は除く。

表-4A 就職先の内訳（建設）

注：(株)は省略 ()内は女子内数

会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計			
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		
竹中工務店	1						1	1	1	1	横河工事			1						0	1		
清水建設	1			1					1	1	新日本建設								3(1)		3(1)	0	
鹿島建設	1	1							1	1	りんかい日産建設			2								2	0
大成建設	1								1	0	勝村建設								1			1	0
戸田建設	2			1					2	1	オリエンタル建設			1								1	0
西松建設	3								3	0	村本建設								1			1	0
前田建設工業	1				1(1)				2(1)	0	東武谷内田建設			1								0	1
奥村組							1	0	1	1	丸五基礎工業	1										1	0
安藤建設						1		1	0	1	平成建設								2			2	0
間組	1							1	0	1	日本建設			1								1	0
鉄建建設		1						1	1	1	野本建設					1						1	0
銭高組								1	1	0	ヤマウラ								1			1	0
長谷工コーポレーション								1	1	0	郡リース								1			1	0
大倉建設								1	1	0	ジョー・コーポレーション								1			1	0
北野建設								1	1	0	サンユー建設								1			1	0
浅沼組								1	1	0	六国建設								1			1	0
三井住友建設				1				0	1	0	紀建設								1			1	0
西武建設								2	2	0	鈴木工務所								1			1	0
高松建設								2	2	0													
総計	12	2	4	5	2(1)	0	25(1)	2	43(2)	9													

表-4B 就職先の内訳 〈住宅・不動産〉

注：(株)は省略 ()内は女子内数

会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計	会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院			学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		学部	大学院
積水ハウス							8(1)		8(1)	0	飯田産業							2		2	0
旭化成ホームズ							6(1)	1	6(1)	1	モリモト							1		1	0
大和ハウス工業							9(1)	1	9(1)	1	スタートアメンティー							1		1	0
三井ホーム							4(3)		4(3)	0	東京ガスリモデリング							1(1)		1(1)	0
パナホーム							1	1	1	1	セキスイハイム千葉							1		1	0
住友林業							2(1)		2(1)	0	多摩中央ミサワホーム							1		1	0
大東建託							2(1)		2(1)	0	トヨタウッドユエーホーム								1	0	1
三井不動産ビルマネジメント							1(1)		1(1)	0	ミサワホーム静岡						1(1)		1(1)	0	
三井物産ハウステクノ							4(2)		4(2)	0	茨城セキスイハイム						1(1)		1(1)	0	
富士ハウス							5		5	0	湘南ミサワホーム						1(1)		1(1)	0	
スターツ							2		2	0	日本建設クラフト						1		1	0	
東新住建							3(2)		3(2)	0	新昭和						1		1	0	
東電不動産管理	1								1	0	サンケイビル						1		1	0	
長谷工コミュニティ							2		2	0	ゼファー						1	1	1	1	
中央住宅							3		3	0	ユアーズコーポレーション						1		1	0	
野村リビングサポート							1(1)		1(1)	0	アトリウム						1		1	0	
スウェーデンハウス							2		2	0	セボン						1		1	0	
藤和コミュニティ							1		1	0	Century21 オープンハウス						1(1)		1(1)	0	
三洋ホームズ							2		2	0	康和地所						1		1	0	
東日本ハウス							1		1	0	第一住創						1(1)		1(1)	0	
大栄不動産								1	0	1	原工務店						1		1	0	
ミサワホーム東関東							3		3	0	ヒューザー						1		1	0	
ミサワホーム西関東							2		2	0	天草産業						1		1	0	
ミサワホーム近畿							1(1)		1(1)	0	プロバスト						1		1	0	
オンテックス							1		1	0	ケンテック						1(1)		1(1)	0	
朝日ビルマネジメントサービス							1(1)		1(1)	0											
総計												1	0	0	0	1(1)	0	91(22)	6	93(23)	6

表-4C 就職先の内訳 〈設備〉

注：(株)は省略 ()内は女子内数

会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計	会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院			学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		学部	大学院
三菱冷熱工業							2		2	0	若林音響				1					0	1
新日本空調							1		1	0	西栄設備事務所						1			1	0
総計												0	0	0	1	1	0	3	0	4	1

表-4D 就職先の内訳 〈設計事務所・インテリア・コンサルタント〉

注：(株)は省略 ()内は女子内数

会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計	会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計	
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院			学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		学部
日建設計							1	0	1	馬場設計							1		1	0
日本設計							1(1)	0	1(1)	カジワザカドー建設事務所							1(1)		1(1)	0
NTT ファシリティーズ				1				0	1	アティスミュージーズ							2		2	0
類設計室							1	0	1	ミダス								1	0	1
大建設計							1	0	1	井上デザイン企画							3(2)		3(2)	0
丹青社							1	1	1	タキズミ							1(1)		1(1)	0
スペース							1	1	1	戸頃建築設計事務所							1		1	0
池下設計							1	0	1	五藤久佳デザインオフィス							1		1	0
日立建設設計							1	0	1	高田建築事務所							1(1)		1(1)	0
中田捷夫研究室				1(1)				0	1(1)	小玉都都市建築設計室							1		1	0
権名美三建築設計事務所							1	1	1	ニトリ							1		1	0
オーク構造設計								1(1)	0	1(1)	ゼニヤ						2(2)		2(2)	0
イクス・アーケ都市設計							1	0	1	アコスト							1		1	0
ポリテック・エイディディ							1	0	1	インフィールド							1		1	0
デザインショップ・アーキテック							1(1)	0	1(1)	ハンセム							1(1)		1(1)	0
総計											0	0	0	2(1)	1	0	20(8)	12(3)	21(8)	14(4)

表-4 E 就職先の内訳 (建材・エンジニアリング)

注：(株)は省略 ()内は女子内数

会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	
YKK ap							1		1	0	東京ナショナル建材								1(1)		1(1)	0
神鋼鋼線工業				1					0	1	橋本総業								1(1)		1(1)	0
トステム								4	4	0	稲垣商事								1		1	0
不二サッシ								1(1)	1(1)	0	北洲								1		1	
三協アルミニウム工業								1	1	0	藤田建築									1	0	1
遠藤照明								1(1)	1	1(1)	1											
総計											0	0	0	1	0	0	12(4)	2	12(4)	3		

表-4 F 就職先の内訳 (製造業・営繕・その他)

注：(株)は省略 ()内は女子内数

会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	
東日本旅客鉄道							1		1	0	ビー・エム・シー							1		1	0	
東京電力								1	0	1	アメリカンランゲージスクール						1				1	0
コムスン							1(1)		1(1)	0	森戸アソシエイツ							1(1)		1(1)	0	
THK								1(1)	0	1(1)	創コーポレーション							1		1	0	
ジャクエツ			1(1)						1(1)	0	ダイヤ商会							1		1	0	
東新工業							1(1)		1(1)	0	ファイブセンス						1			1	0	
総計											0	0	1(1)	0	2	0	7(3)	2(1)	10(4)	2(1)		

表-4 G 就職先の内訳 (官公庁・法人)

注：(財)は省略 ()内は女子内数

会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計	
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院
中野区役所							1(1)		1(1)	0	鹿島町役場							1		1	0
栃木県庁							1		1	0	日本大学理工学部建築学科副手			1(1)	1					1(1)	1
朝霞市役所								1	0	1	総計										
											0	0	1(1)	1	0	0	3(1)	1	4(2)	2	

表-4 H 就職先の内訳 (進学)

注：()内は女子内数

	学部	大学院	計
日本大学大学院	69(19)	1	70(19)
東北大学大学院	1		1
法政大学大学院	2		2
武蔵野美術大学大学院	1(1)		1(1)
多摩美術大学	1		1
京都工芸繊維大学	1(1)		1(1)
日建学院	1		1
バンタンビジュアル研究所	1		1
東京アザイナーズ学院	1		1
東京コミュニケーションアート専門学校	2(1)		2(1)
アトリエK&Y CAD DESIGN SCHOOL	1(1)		1(1)
留学希望	5(1)		5(1)
その他	16(5)		16(5)
総計	102(29)	1	103(29)

表-4 I 就職先の内訳 (自営業)

注：()内は女子内数

	学部	大学院	計
設計事務所・インテリア	1		1
総計	1	0	1

表-5 企業内定の応募方法

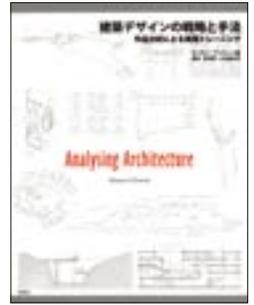
	学部	大学院	計	比率
教室推薦	13	2	15	6.9
研究室推薦	5	9	14	6.4
縁故推薦	7	0	7	3.2
自由応募	158	24	182	83.5
総計	183	35	218	100.0

注：官公庁、法人、大学院進学、自営業を除く。

書評：創るために観察せよ。そして、分析せよ。

山中新太郎

サイモン・アンウィン 著
重枝 豊 監訳 上利益弘 訳
『建築デザインの戦略と手法
—作品分析による実践トレーニング』
(彰国社, 2005年)



そもそも建築空間分析とは何だろうか。何のために空間を分析する必要があるのだろうか。この問いに対して著者サイモン・アンウィンの立場は明快である。創るために建築を観察し、分析せよ、というのである。「建築家の素養は、他の建築家の作品を分析・評価することで養われる。これは「建築に蓄積されてきた力」であり、建築家たちがどのようにこの力を利用してきたかを洞察することで、彼らのデザインにそれらがどのように活用されてきたかを知ることができる。」このことは建築教育の王道のような考え方だ。しかし、正面からこの課題に取り組んだ本は意外にも少ない。ましてや邦訳本となればなおさらだ。

この本は600あまりの図版と200ページのテキストから構成されている。収録されている図版のほとんどは、写真でもハードラインの図面でもなく、著者によるフリーハンドのスケッチである。本書を手にとってみると、まずこの圧倒的なスケッチの量に驚かされる。この本は、建築家であり、建築空間分析に関して20年以上にわたり講義を続けている著者による、建築作品分析ノートの集大成である。スケッチはどれも著者自身の空間分析を解説するために描かれているのだが、著者はこれを極めて意識的に創る過程で描かれる建築家のアイディアスケッチのように描いている。収録された建築作品のエッセンスを、あたかもその作品を創った建築家のように、自らのスケッチの形で見せてくれるのだ。ここでは、建築を観察し分析するという行為と建築を創る(設計する)行為が意図的に重ねあわされている。アンウィンにとって、観ることや分析することは、建築を設計することにつながる創造的な行為なのだ。こうした姿勢がこの膨大

な量のスケッチの中に如実に現れている。

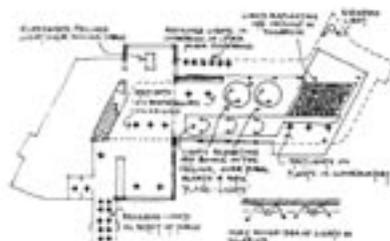
〈複数の役割を果たす要素〉〈「構図」をつくるものとしての建築〉〈「神殿」と「小屋」〉〈存在することの幾何学〉等々。これらは章立てとなっている本書に収められた空間分析のキーワードだが、一見して分かる通り、本書は建築の分類を目指すものではない。むしろ、建築の中に現れるさまざまなエッセンスを独自のキーワードによって多面的に分析することを目指したものである。対象となっているのは、住宅、神殿、教会、美術館、議事堂、劇場、図書館、庭園などで、有史以前のものから現代建築まで多岐にわたっている。これらを規模や様式、ビルディングタイプや時代性などから切り離して、先に挙げたキーワードによって並び替え、建築空間と人間の感性が紡ぎ出す魅力的なストーリーに仕立て直している。中でも〈ここにあるものを使用すること〉や〈平行に配された壁〉は面白い。

建築空間に対する一義的な解釈や意味付けに違和感を感じずる部分もあるが、建築の中に共通して現れる空間構成要素に着目して、それが空間認識に及ぼす効果やそれがもたらす象徴性などを分析し、建築を創る(設計する)発想へとつなげるという方法論には十分な説得力がある。また、歴史的な視点とも計画論的な視点とも異なる本書の視点は、いわば、歴史と計画という二つの研究領域の挟間を埋めるようなものでもあるともいえる。絵を見るだけでも楽しい本ではあるが、学生にはその分析をじっくりと読み込み、自分なりの批評性を持って、設計へとつなげてほしい一冊である。

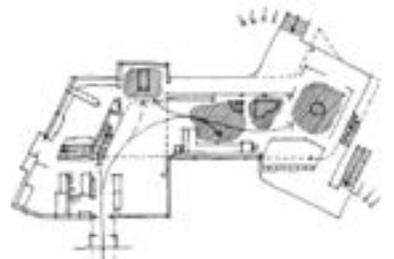
(やまなかしんたろう・非常勤講師, 建築家, 工学博士)



シュミンク邸 外観スケッチ



シュミンク邸 照明計画の分析



シュミンク邸 動線の分析

短期大学部建設学科 オリエンテーション報告

星 和磨



赤レンガ倉庫にて

1年次生を対象とした短大建設学科オリエンテーションは、本年度からリニューアルし「科目オリエンテーション」「建物見学オリエンテーション」と2つに分けて実施しました。

●科目オリエンテーション

短大は2年間での完成教育であるため、入学後すぐに専門科目（建築計画Ⅰ・構造力学Ⅰ・建築材料Ⅰ・一般構法・建築実験Ⅰ・デザイン基礎・環境の計画と技術）がスタートします。そこで、建築学はどのような分野を学び理解していく必要があるのか、早いうちからイメージできるよう4月10日に科目オリエンテーションを行いました。

オリエンテーションは、構造系（担当：黒木二三夫短大助教授）、計画・設計系（担当：田所辰之助短大専任講師）、環境・設備系（担当：吉野泰子短大教授）、情報系（担当：羽入敏樹短大専任講師）の4分野に分け、行なわれました。それぞれの分野において、なぜそのような分野があるのか、何を修得することを目的にしているのか、どのような科目群があるのかなどについて解説が行われました。各分野において動画による解説、学生作品を間近にすることなどができたため、入学後1週間の新生生にとってとても刺激的なものであったでしょう。

●建物見学オリエンテーション

キャンパスを離れ、実際の建築を肌身に感じ、先生との対話を持つことを目的として、5月19日に建物見学オリエンテーションを行いました。当日は、専任教員

に加え、デザイン基礎担当の非常勤講師の先生方も参加してくださいました。見学先は、三溪園、横浜大栈橋国際旅客ターミナル（2002年竣工、設計：FOA Foreign Office Architects）、赤レンガ倉庫（2002年竣工、設計：妻木頼黄、改修設計：新居千秋）という趣の異なる3カ所です。オリエンテーションに先立ち、一般構法の講義で、三溪園・聴秋閣についての解説、コンピュータリテラシの演習で、インターネットによる見学場所の調査およびオリエンテーションパンフレット作成、建築計画Ⅰの講義で、見学後の感想を課すなど、通常の授業との連関がおこなわれました。

当日は5月中にも関わらず最高気温が28度近くになるほど天気にも恵まれました。三溪園では、「次は三重塔を見なくては」といって熱心に園内の地図を見ていた姿が印象的でした。中華街・聘珍楼での昼食では、大皿の料理を取り分けて食べることに戸惑う学生が多い中、各円卓に先生が入り、オリエンテーション、普段の学校生活などの話をしながらの楽しい食事となりました。その後、横浜大栈橋国際旅客ターミナル、赤レンガ倉庫を見学。双方が対岸に位置しているため、ディティールとプロポーションを見ることができ、とても有意義な見学となったのではないのでしょうか。

今回、短大建設学科では2つのオリエンテーションを実施しました。単に学生同士、学生と教員の親睦だけではなく、「建築好き」になるきっかけになればと期待します。（ほしかずま・副手）



三溪園にて：次の見学先を地図で確認



中華街にて：昼食と懇親会



横浜大栈橋にて：大沢悟郎非常勤講師の解説

■中島肇元非常勤講師，斎藤公男教授，黒木二三夫短大助教授，岡田章助教授連名の原著論文「膜材料の応力弛緩を考慮した応力一ひずみ曲線モデルを適用した構造解析 張力膜構造の応力弛緩に関する基礎的研究（その2）」が，日本建築学会構造系論文集 No.591（2005年5月号）に掲載された。

■佐藤慎也助手，本杉省三教授連名の原著論文「演劇創造活動における稽古場と舞台の利用に関する研究『だれか，来る』公演を事例として」が，日本建築学会計画系論文集 NO.592（2005年6月号）に掲載された。

■岡田章助教授，多田脩二氏（'95年修了）が，「中国木材名古屋事業所」により「2005年 JSCA 賞 作品賞」（主催：日本建築構造技術者協会）を受賞した。その他に同作品は「2004年度 JIA 新人賞」（主催：日本建築家協会），「第15回松井源吾賞」（主催：松井源吾記念会）を相次いで受賞している。

■吉田燦元教授，関口克明教授，川西利昌海洋建築教授，吉野泰子短大教授および中国研究者11名は，1月，中華人民共和国建設科学技術奨励委員会から，黄土高原緑色洞民居建築研究に対して「中聯重科杯」を授けられた。受賞等級は一等賞。本研究は永年にわたり理工学部海外提携校西安建築科技大学劉加平教授との間で進められてきたもので，黄土高原の地中住居に関する建築環境工学的な研究が評価された。中聯重科杯は国家レベルの科学技術に貢献した者に与えられる賞。

■小石川正男短大教授の『大きな屋根の木の木の下で…』は「第1回住まいのデザインコンテスト 優秀賞」（主催：ナムラコンチネンタルホーム）を受賞した。戸建住宅（木造2階建て）の新デザイン

教室ぶろむな一ど

をテーマに164点の応募から選ばれた。



「大きな屋根の木の木の下で…」

■雨宮廣明君（若色研M2）の「SHIBUYA COMPACT CITY」が，「第37回毎日・DAS 学生デザイン賞 建築部門賞」（主催：毎日新聞社，総合デザイナー協会）を受賞した。デザイン界の人材発掘と育成を目的として実施されており，293点（79校）の応募から選ばれた。



毎日・DAS 学生デザイン賞作品展

■「第25回 NU 建築フォーラム」が，6月22日に CST ホールで開催された。「渡辺誠来たる！……時空を超えて」をテーマに，渡辺誠氏が講演を行い，グラーツで開催された美術展への参加，水俣に完成した駅と門などの最近作を紹介。続いて，モデレーターの横河健教授と対談を行った。

■「NU 住宅展 2005」が，5月14～24日に CST ギャラリー 14A～B で開催された。横河健教授設計による『上野毛の住宅』の敷地を課題とした，住宅作品が展示された。これらは，昨年度に行われた，大学院「建築デザインワークショップ」，横河・高宮両研究室の3年生「ゼミナール」内で設計された作品。



NU 住宅展 2005

■斎藤公男教授，岡田章助教授と同研究室の大学院生ら20人の手により，5月7日，「愛・地球博 2005」の会場内に日差しや雨から来場者を守る休憩所が建設された。この建物には「張弦シザーズシステム」が採用されており，収納・展開が容易で繰り返し使用できる点の特徴，バイオ・ストラクチャとも名付けられている。豪雨と柔らかい地盤，資材の人力運搬という悪条件の中，実質6時間程度で無事に建設が終了した。



愛・地球博 2005 休憩所

●駿建目次

(2005.7 Vol.33 No.2 通巻 134号)

表紙「puca puca」

設計：今村雅樹

撮影：今村雅樹

建築を学んで進んだ道	2	書評：	
欧米の環境都市を訪れて	8	創るために観察せよ。そして，分析せよ。	18
新任非常勤講師紹介	10	短期大学部建設学科	
私と建築	13	オリエンテーション報告	19
平成16年度 建築学科就職状況	14	教室ぶろむな一ど	20